

橘ありすのそばに居たいだけ。

桃梨 蜜柑@ILIM

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ロリ百合小説です。

オリ主で転生モノですが、TS（性別転換）モノが苦手なので本当に純粋な百合モノになったりするですよ。

百合百合言ってますが、恋愛しない可能性しかありません。（その為、ガールズラブタグは付けてません。

ロリっ娘が仲良くしてるだけです。うん。

ドルオタでアニオタでゲーオタでロリコンでシヨタコンな元ひきこもり学生（高校生）な女の子がロリに転生、大好きな橘ありすのそばに居たい為に頑張る話。

とりあえず、主人公の性格がかなり歪んでいるため気持ちの悪さを感じる可能性があります。

気持ちの悪さはわりと計算上です。

こっから主人公、弥生うさぎがどう変わって行くかを見届けて頂けると嬉しいです（*^_^*）

表現力がなくて申し訳ないです！

目次

8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	第1話
46	40	35	29	22	14	7	1

第1話

私はブスだ。髪はぼさぼさで頬はニキビまみれ。

声もそこまで良くない。歌は歌えない訳じゃないけど歌わない。スタイルも悪くて、目付きも悪い。

学校なんて行ってない。行ったところでいじめられるだけ。

アニメが好き。ゲームが好き。アイドルが好き。

それだけでなぜいじめられなきゃいけないの…？

いつか、アイドルになりたい。

憧れのあの子と歌ってみたい…。

そう思ったらダメなの？

私は家に引きこもり、ずっとゲームをしている。

『ひきにゃんさんはいつ寝てるんですか？』

『ひきにゃんさん、さすがにそろそろヤバくないですか？』

『ひきにゃんさんパーティ組んで討伐いきましょー』

『ひきにゃんさん最近おすすめアイドルは居ますか？』

かたかたとキーボードを叩く。

『寝なくても平気。ヤバくない。討伐おk。おすすめアイドル…？あ

んたはカワイイ幸子が好きそう。』

『寝ないとダメですよ！』

『飯くってるん？』

『死んじやうヨー？』

チャットを見て笑う。

「早く死にたいんだから、それでいいよ。」

『わかったわかった、キャラクター宿屋に寝かせて食事させるわ』

『いやいや…』

『さすがひきにゃんさん』

『そこにしびれる懂れる』

でもさすがに4日不眠で絶食してたらキツイ。

BGMとして音楽を掛けている。

一人暮らしだから誰にも邪魔されない。

今は咲いてジュエルを聞いている。

さつきは in fact。

その前はハイファイデイズ。

『ひきにゃん、静かになつた？寝たかな？』

『いや、普通にキャラクター動いてるから起きてるだろ』

『おきてる。今、曲聴いてただけ。』

『ひきにゃんさんって音楽が好きなんだっけ。』

『シンデレラガールズが好きなんだよネー』

私はキーボードに指を叩きつけるように打ち込む。

『シンデレラガールズのありすが好きなんだよ』

『あ、ひきにゃんさんってロリコンだったか。』

『確か、シヨタコンでもあるよな。』

『この前、もふもふえんの話してたしな。』

『ロリコンシヨタコンのドルオタでアニオタでゲーマーだけどこ何か問

題ある？』

現実ならここで静まるけど、チャット上では会話は続く。

だって、私と似た人がたくさん居るから。

『ひきにゃんさんだけじゃないしwもつと凄い奴、転がってますよ。』

『ひきにゃんさんに文句など恐れ多い！』

『ひきにゃんと討伐行きたいー。』

『ちなみに俺氏は薰たんLOVE』

異様な眠気がくる。

リポDを飲んで、またチャットする。

絶飲は出来なかった。

私の周りにリポDが転がっている。

カフェインの摂り過ぎかもしれないけど、知った事か。

身体がフラフラする。

あ、これはヤバいやつなきがする。
ぐらりと倒れる。

キーボードとともに床の上にだいぶする。
やっただ。

やっとわたしはこの世界とさよならできるんだ。

笑顔のまま、意識を放り投げた。

霧がかかっている寒い場所に今、私は存在している。

天界とか信じてなかったけど、こういうのを天界っていうのかしら。

『あなたは何故、命を投げ出した…？』

どこかから声が聞こえる。

決まってるじゃん。

もう、疲れたんだよ。

誰にも助けてもらえない。

誰にも本当の自分をわかってもらえない。

誰にも私を愛してもらえない…。

そんな世界なんてもういやだよ。

『もしも生まれ変わるとしたら何がしたい。』

いや、話聞けよ。

『何がしたい。今すぐ答えないと蘇生させろ。』

なんだよその脅し。

生まれ変わるのもごめんなのにさー。

『いや、ここで可愛くなつてアイドルになりたい☆とか言ってくれないと話が始まらないんですけど。』

絶対言わないけど…

あ、ありすちゃんに会いたい。

ありすちゃん大好きなんだよね。

願わくば、ありすちゃんのそばに居て愛でたい。

『お、おう。やっと話が進んだな。』

その願い、叶えよう。』

え、あ、嘘。

『天界に来るには若すぎるんだよ。』

もっとと人生を謳歌しなさい。そしたら、また会おう。』

”声”が私を突き飛ばす

体が小さい。

髪が長すぎる。

ツインテとか何年振りよ。

近くにあった鏡を見る。

「え…?」

そこには私好きなツインテのロリっ子がいた。

「うさぎー?どうしたの?」

え、待ってどういう事。

言葉が勝手に出る。

「なんでもなーいっ!」

それより、あさごはんまだあー?」

「もー!早く降りてきなさい!」

身体が勝手に動いてくれる。

いや、いやいやっ!待ってよ!?

(あなたは弥生うさぎ。あたしも弥生うさぎ。ここまで育てるの大変だったんだからね?)

こうやって転生してきた人の身体を育てるのがあたしの仕事。あなたが慣れたらあたしはいなくなるから。まあ、しばらくよろしく。

「いやいや、意味わかんない。」

なんだよ、その転生とかなんとかか。

夢でも見てるわけ?

「うさぎー?」

夢なら。

アイドルにだってなれるかしら。

そしたら……どこか寂しそうな少女……橘ありすのそばに居られるのかな。

「ほら、遅刻するわよー?」

「はあいつ!」

待て。私は何歳なんだ?

(今、10歳。小学生だよ。ほら、時間割りみて準備準備。

うわあ。学校とか嫌だよ……。

そんな考えなんて、学校に着いたらすっぱりと消えた。

「え。ありすちゃんだ。」

テレビやパソコンの動画でしか見た事のない少女が私の目の前を歩いて、私の通う小学校に入っつていったんだから。

2話

目の前を颯爽と歩くありすちゃんに目を奪われる。

嘘でしょ？

まさか、橘ありすと一緒の学校なんて。

「……………何をじつと見てるんですか？」

見られている事に気付いたありすちゃんが私の目の前でしゃべってる…。

え、こういう時はなんて言えばいいんだっけ。

「あ、あの……………わ、私……………」

「弥生さん、今日はカウンター当番ですよ。忘れないで来てくださいね。もしかして、それが聞きたかったんですか？」

ありすちゃんと面識があっただんだ!?

(あーごちやごちやうるさい。あんたの願いを最大限叶えてるの。橘さんって呼ばないと怒られるから注意ね。

別に仲良しとかそういうのじゃなくて、橘さんは図書委員会の副長なの。当番を管理する仕事だから今教えてもらえたの。

勘違いしないように。馴れ馴れしくすると怒られるわよ。ほう。

ありすちゃんが一緒ならもうなんでもいいや。

うっはあ…幸せじゃん。

私がアイドルとかならなくてもいいわ。うん。

(あ、橘さんは滅多に学校来れないから。

嘘だろ。おい。

アイドル業大変だもんね。仕方ないね。

いや、わかるわーですよ。涙なんて流してないです。はい。カウンター当番の時にまた会えるよね。うん。

(いや、難しいだろ。仕事大変だって理解しなね?)

明日また会えるよね! 沢山楽しい事作りたいよね! (半ギレ)

とりあえずいい夢見るためにありすちゃんの後ろ付いて行こう。
ありすちゃんをストーキングです。怒らないでくれよ。

さあ。屋上にありすちゃんは居ます。

え？ここで飛び降りとかダメだからね!?命大事に!

(どの口がそれ言ってるのよ……)

「あー……♪あー……♪あー……♪」

ありすちゃんが声を出してる。

発声練習?

お腹を押さえて声を出してる。

凄い。音量が凄い。

あんな小さな身体からどう出してるんだろう。

「おー願い♪シンデレラー♪」

夢は夢でおーわれない♪……はあ。

上手く歌えるようになりたいです。」

「じゅ、十分に上手いよ!」

「へ?」

あ、ついうっかり……。

(あんたってバカ?バカなんだよね?うん、バカなんだと思う)

いや、だって上手いのに……あーやって落ち込んでたら励ましたくなるんだよ。ありすちゃんは私の天使。マイエンジェルだもん。

「や、弥生さん……?いつからそこに……。」

「ごっ、ごめんなさい!!屋上に行ったら橘さんが歌ってたから……ついで、聞いちやって……。」

もう一人の私が、取り繕ってくれる。

ありがとう。マジで感謝。

「あ、ああ。そうなんですネ。

じゃ、じゃあ私は教室に行きます。

弥生さんも始業に遅れないように、ですよ?」

「は、ひゃいつ!」

ありすちゃんに戻ってしまふ……。

何あの天使。

少し慌てた顔も可愛い。可愛い。写真撮って飾りたい……。ほつぺたはむはむしたい。可愛い。

(この変態。

冷たくしないでよ、酷いよ。

同じ弥生うさぎ同士仲良く……いや、無理だわ。

友達の作り方とかわかんないし。

っていうか、この子いじめられたりしないよね!?

私、いじめられ体質なのに!!

(逆に人気者です。だって可愛くなるように育てたし?)

うっわあ。そういうのマジで要らないオプシヨン。

普通が一番だよ。普通が。

そもそもこうやって転生させられてかなり迷惑してるんだけど、ありすちゃん天使可愛いからいいけど。

「うさぎっちー?」

ほら、ウサビツチみたいなあだ名って絶対略してしまい、将来自分を苦しめるの。ちなみにウサビツチっていうアニメは面白いよ。プーチンとキレネンコめっちゃいいよオススメだよ。キレネンコ超好きだよ。

あ、そうそう。小学生って言葉の意味知らなくて凄く卑猥な言葉言えたりするしね。ソースはあの花。

って、今呼ばれたのって私よね。

「はいはい?どったのー?」

可愛い女の子が沢山です…。

え?何ここ、天国ですか?

(うっわ、変態。キモいんだけど。

「この問題がわかんないく。」

漢字の問題か…。

むむう。簡単すぎるけど、あんまりスパスパ教えてもこの子の力にならないし…。

(あー！じれったい！見てなさい。いつもどう教えてるかを！

「えつとね。まずは漢字の成り立ちから考えてみよー♪」

やつべえ、わかりやすい解説ありがとうございました。でも長いから割愛。

モブ子ちゃんも満足満足。

え？

転生特典つてやつ？このチート級の学力。

(ちがわいっ！お前、小学校の勉強くらいならまともに出来るでしょ？だから至って普通の事。

中学校は保証しないけど☆

うん、そんなもんか。

私の転生特典つてないの？

(ありすの学校に通えてるじゃないか

あ、そゆこと？

っっていうかゲームしたい。

家にパソコンあるかなあ？かなあ？

(あるよ、あんた用のノーパソ。

お！ラツキー♪

コントローラーとかないだろうけど、キーボードで十分十分♪(ワクワク

家に帰ったらゲーム出来るといいな♪

……はっ。

超満喫してしまってる。

鏡を見てにこっと笑えばロリスマイルで可愛い。

美少女補正とかぶつちやけ要らないけど、こういうのだったら歓迎

さ。うん。

「うさちゃん〜。」

また呼ばれた。

「ふええ…、どうしよお…。」

またライブチケット落選しちやったよおお…。」

……不吉な事を言ってるう。

「ど、どこのライブチケットかな？」

「c a f e p a r e d e ともふもふえん…。」

おい、もちろん私は応募してんだよな？

(すっかり忘れてた。当落今日だったっけ。

おい、お前ももふもふえん好きなのかよ。

(…直央くんかわいすぎるんだもん。)

「あ、え、えつとき、そんなに落ち込まないで？

大丈夫、私が当てて見せるからっ。」

「うう…志狼くんに会えるかなあ…。」

「会える！絶対！会える！」

うっわあ、当落怖え…。」

「そだねっ！うさちゃん、3回に1回当ててるもんね！」

確率微妙だな！おい！

(だって、別に補正とかないですし…。確率u p させたいよ…真面目に…。)

あ、チケットキャンプとかでチケット買うのはダメだよ？転売は滅せよ！

もし、チケットが手に入らなくてどうしてもチケットが欲しい時は、同行者を募ってる人や当日どうしても行けない人から公正な値段で譲って貰いましょう！

これ大事ね。本当に転売はダメ、絶対。

売ってるのを買うのもダメ。
いくら高額でチケット買ってもライブの運営さんには利益になら
ないんだよ。

(ヒキニートなのにやけに詳しいのね。

ヒキニート言うな！

昼休み、図書室に行ってみる。

カウンターで童话集を読みながら、ありすちゃんが佇んでいた。

「あ、弥生さん来ましたか。」

今朝はお褒めの言葉、ありがとうございますございました。

とても嬉しかったです。」

クール橘が微笑んでいます。

え？なんでカメラないの？この一瞬を永遠に切り取りたい。ヤバ
イ可愛いマイエンジェル！

「そ、そんな……、こっちこそ少し歌が聞けてよかったです……。」

ありすちゃんが鞆からファイルを取り出す。

そして、チケットを差し出してくれる。

「これ……本当は別の人にあげる予定だったんですが、都合がつかない
……と思うので。」

来週行うライブのチケットです。

よかったら来てください。」

え……？

チケット……？来週……？ライブ？

頭いっばいに？が浮かぶ。

「別の人……って誰ですか。」

疑問が素直に口からこぼれ出る。

「母です。いつも忙しいですから。」

弥生さんも……忙しいですか？」

忙しくはない……全然空いてると思う……けど。

母親の都合がつかない”から”じゃなくて、都合がつかない”と思うから”なんて…。

「ありすちゃん…お母さんにはちゃんとライブ来てって言ったの？」

私は今からありすちゃんを怒らせるだろう。

酷い場合…口を聞いてもらえなくなるかもしれない。

でも、せっかく母親の為にチケットを用意したのに…母親じゃなくて私が行くのは間違ってるよ。

そんなの絶対私は許せない。

3話

ありすちゃんは怒らなかつた。

ただ、寂しそうな顔でこう言った。

「帰ってくるのが遅いんです。お休みも少ななくて。

帰ってきたら、とても疲れきっているんです。

それなのに、私の為に休んでなんて言えませんよ。」

私は馬鹿なんだと思う。

ありすちゃんのファンなのに、ありすちゃんを哀しませるなんてファン失格だ。

でも。ありすちゃんは…お母さんに来て欲しいんだよね。

来て欲しいからチケットを取ってもらったんだよね。

「弥生さんにはきつと…わからないでしょうね。」

そう言つて、ありすちゃんは図書室から立ち去つた。

チケット…返さなきゃ。

(あんたつて自分から地雷に突つ込んでいくんだ…)

本当に馬鹿ね。

ありすちゃんと仲良くなるチャンスを自ら捨てるのか…。

「私つてほんと、馬鹿。」

ソウルジェムも真つ黒になつてさやかちやあああああんつて
なつちやう…。

ごめん、ふざけた。

ふざけてないとなんか泣きそうなんだもん。

30分後、なぜかありすちゃんが戻ってくる。

「いい忘れてました。」

ありすちゃんではなく、橘です。忘れないでくださいね。」

あ、チケット…。

「チケット、返します。」

お母さんだつてきつと…ライブに誘つてくれる事を待ってますよ。」

チケットをありすちゃんに渡す。

けど、受け取ってもらえない。

「弥生さん。」

弥生さんが来てください。

絶対に、貴女を楽しませてみせますから。」

ありすちゃんは笑ってくれた。

でも、私の頭の中はぐちゃぐちゃだ。

「これ、見てください。」

タブレット端末を私に差し出してくれる。

【○／○ 出張が入りました。ご飯はちゃんと食べてね。】

それはライブの日に刻まれた母親の予定だった。

「さつき、予定が届いたんです。」

もうこれで母を誘う事は出来なくなりました。

……出来なくなっただんです。」

消え入りそうな声で、今にも泣き出しそうで。

そんなありすちゃんを私はみつめる事しか出来なかった。

私が男の子なら抱き締めてあげる事…いや、無理だな。うん。

「わかった。」

私、ありすちゃんのライブ行きます。ペンライト、誰よりも振って

…ありすちゃんに届くようにコールもするっ！」

「いや、それはいいです。結構です。」

断られた…。そんなに拒絶しなくても…。

午後の授業開始前のチャイムを聞いて、ありすちやんと別れる。やっぱり、少し気まずかった。

(あんたが男の子なら恋愛フラグもあつたんじゃね?)

おい、そろそろ私への扱いがテキトーじゃねーか?

(気のせいダヨ。)

途中片言だったんですけど…?

まあいいか。

ありすちやんのライブに行けるのは嬉しい。

嬉しいけど、まだなんか腑に落ちない。

「むう…。」

あれか?アイドルにスカウトされるフラグ的な奴?

主人公補正的な奴?

だからこんなに私に都合いいわけ?

「うさちやーん。」

あ、またさっきの幼女ちゃんだよ。

(皐月ちゃんな。お前の親友だからな?)

あ、モブ子ちゃんじゃなかったんだ。へえ。

皐月ちゃんかわええのう…。

(うっわ…キモいし引くわ…。)

「どうしたの?皐月ちゃん。」

「あのね、もう一枚の方当たってたー!!」

あ、さっきのもふもふカフェパレのライブか。

咲ちゃん可愛いよね。スカート似合うよね。

咲ちゃんhshsしたいよね。壁ドンに顎くいしてみたいよね。

でも知ってる?咲ちゃんは男の娘なんだよ?

はあ…かのんくんもいずれはあんな風に…?

(やめいーはあはあするなーキモいわボケ。)

もっふいんぎぼつくす♪だよ!

箱の中に可愛いシヨタが隠れてるんだよ!

可愛いから撫で撫でしたくなっちゃうよ！

(もういや…こいつの相手疲れる…)

あ、その前にありすちゃんのこと。

反省しなきゃだよなあ。

どう考えてもありすちゃんを傷付けてしまったし。

うう…。謝らなきゃ。

——放課後。

私は校門でありすちゃんを待ってた。

さすがに今の時期って寒いんだねえ。

ちっちゃい身体はすぐ冷え切ってしまいます。

ありすちゃん、来ないな…。

待ち伏せしてるの気付かれて来てないとか…。

ありえるなあ…。

「…弥生さん？」

可愛い声が聞こえるなあ…。耳が幸せ…。

「や、弥生さん!? だ、大丈夫ですか？」

なんか小刻みに震えてますけど!?!」

「ら、らいひよーひゆれす! (大丈夫です!)

ありひゆひゃんにりよーひがはっへ! (ありすちゃんに用事があつ

て!)

「何言ってるかもわかりませんし…! 私に用事ですか? とにかく暖かい場所へ行きましょう。」

ありすちゃんが取り乱しています。

あ、これ滅多に見れない表情かも。レアだよ。レア。

ありすちゃんに手を引かれて学校内に戻った。

「もうこの手…洗えない…。」
（いや洗えよ。）

ありすちゃんの教室に連れて行かれました。
誰も教室には残ってません。

ふ、2人きりはハードル高いなあ…。

「すみません。暖かい場所と言っても、教室くらいしか思い浮かなくて。

いつもならプロデューサーが迎えに来てくれるんですけど、今日はオフなんです。」

「いえ、こちらこそごめんなさい。

お昼も、今も…その…迷惑かけてごめんなさい。」

ありすちゃんの手が離れる。

あ、温もりがあ…。

「まだお昼の事を気にしてたんですか？

弥生さんって、案外気にしちゃう人なんですね。」
くすくす笑ってくれる。

「こんなの慣れっこです。私は子供じゃありませんから。」

いや、十分子供ですよ。貴女。

「それに…誰かが来てくれる方が嬉しいんですよ？」

…なにこの子、私に道をもつと踏み外せと？

可愛いよ。恋しちやいそうですよ。チョロイン枠になりそうだよ私。

「ありすちゃんのライブ楽しみですよ！」

話題を変えよう。ヤバい。可愛すぎてヤバい。

「…がんばります。」

あ、これ緊張してるかも。

「島村卯月、頑張りますっ！」

卯月ちゃんの真似を試してみた。

イマイチ面白くなかったらしい。

「…燃やせ友情パッションは…みつつぼし！」
ちゃんみお…。これもダメか。

最後にとっておき!

「…:…:によわあ〜?りんちゃんだに…:…:りんちゃんのきゅんきゅんぱわー?で…:ハピハピさせるにい…:…」

ありすちゃんが笑い出した。

「…:…:くふっ…:…:おなか…:いた…:…:ぷはっ!」

よし。デレラジで学んだしぶりんの黒歴史、ありがとう。しぶりんの犠牲は無駄にしません!

(おいこら。)

「弥生さんって、案外面白いですね。

嫌いじゃないです。」

「本当!?結婚しますか!?!」

「しませんよ。」

即答で断られましたよ。ぐっばいまいらぶ。

ちよつとー。なんで私を男の子にしてくれなかったのさー。

(それだどこちらとしては都合が悪いんだよ!察しろ!)

察する事が得意な人間ならお昼の一件は起きなかった。ワタシ、ワカルヨ。

ありすちゃんかわいい。お人形みたいに肌が白い。

音楽かけながらタブレットをタップしている姿も似合う。

ゲームしてるのかあ…:

ゲーム?

ミュージックな感じのゲーム?

「あ、私がゲームしてるのって意外…:でしたか?

音楽ゲームでリズム感を鍛えてるんですよ。

やってみます?」

ありすちゃんがタブレットを私の目の前に置いてくれる。

「えっと、曲は何してもいいの?」

「ええ。いいですよ。」

難易度は簡単で、と親切に変えてくれるけどいいもんね。

難易度高い奴をやるもんね。

選んだ曲はnear to youでした。

あなたのそばにだよ！ありすちゃんのそばにだよ！

(誰もそんなの聞いてないし。)

「きつとおいついて♪ふんふんふん♪」

ありすちゃんが呆気にとられた顔をしています。

でも、転生前はゲーマーだったんだしさー。出来るよね、私。ていうか出来たね。さすがは私。偉いぞ。

「え…あ…」

ど、どうやったらこんなにも上手く出来るんですか!?!教えてくださいさ
いっー！

食いつくねえ。

「上手くなったら…きつと…プロデューサーさんに褒めてもらえます
から…えへへ。」

おい、プロデューサー。どこの馬の骨だよ。出てこいや。

そんなわけで、30分くらい一緒に音ゲーで遊んでました。

ワンミスする度に悔しそうな顔をするありすちゃんかぁいいよお

…おーもちかえりい♪

かぁいいモードの私を誰も止められないぜ。

(はいはい。橘さんを遅くまで残すな。はよ帰れ。)

スマホ欲しいなあ。母らしき人に言えば貰えるイベントかしら。

(え？スマホあるけど?)

それ先に言えよ。

「ありすちゃん、よかつたら連絡先…line教えてくださいさ！」

「…攻略法、絶対教えてくださいね。」

転生初日、ありすちゃんの連絡先ゲット。

トントン拍子で進みすぎてちよつと怖いなあ。

あ、もふもふカフェパレは落選してたけど皐月が当ててたからよ
かった…。

4話

「ただいまあ。」

かちやつとドアを開けようとしたら鍵が掛かってた。
ランドセルから鍵を取り出す。

「ただいまあ…?」

人がいる気配がしない。あれ? 優しそうなマミーは?
ていうかパピーは朝から見えてないんだけど。

(お母さんは仕事。お父さんは…居ないのよ。

とりあえず夕飯を用意してくれてるはずだから食べましょ。

そうなんだ。それは寂しいな。

お母さん、いつ帰ってくるのかな。

夕飯はきちんと作ってあって、ラップの上にはメモもあった。

【うさぎへ】

残さず食べる事。今日も1日よく頑張ったね。」

弥生うさぎのお母さんの優しそうな顔を思い出す。

本当に私がこの身体をもらっていいのかなあ。

こんな恋愛を注いでもらって、きつと優しくて人気者な弥生うさぎ…。

多分、私はすぐに嫌われるぞ…?

あー。これが夢でも全然いいよ。

いつそ、全て白昼夢でもおっけーだよ。

そういうエブリデイドリームの意味ってどっちなんだろう。

エブリ・デイドリーム? (全て白昼夢)

エブリデイ・ドリーム? (毎日が夢のよう)

うーん。謎だわ。

とりあえずお母さんのご飯を温めて食べる。

(あんたってなんていうか変よね。どっか冷めてるし。

普通なら”転生ウエーリー”って言ってもおかしくないのに、
それが無いし。

「転生ウエーリー (棒読み)、はい言ったよ?」

(そういう話じゃないんだってば。

転生転生って言うけどさ、別に転生したかったわけじゃないんだってば。

でも転生しなきゃ蘇生させられるとか脅されたんだからさ…。あのアホ神様…。

(きぐるみのかみさまをバカにしないでよねっ。

きぐるみの神様…？なんか聞いた事ある。

『座右の銘はきぐるみのかみさまはいるよ！です！』

あ、かのかくんか。

かのかくん可愛いんじゃないか…。

(だから、きぐるみのかみさまなんだってば！ふわもこのジャスティスキユートなんだってば！

はいはい。

あんたもかのかくん好きな事はわかりましたから。

(うう…信じてくれないとか…。

あー。パソコンでゲームする。

確かアカウントのパスワードとか覚えてるし大丈夫でしょうっと。

「リンクスタート！」

誰もつつこんでくれない…。

別にソードアートの訳じゃないからね。

『システムメッセージ：ひきにゃんがログインしました』

『お、ちゃんと寝てたんだな。ひきにゃん。』

『ひきにゃんさん降臨！』

『やあやあ。君が生きててよかったよ。うん。』

実は転生先でこれやってますとか言ったら、今すぐに寝ろと言われてそうだなあ。

『おひさ。リアルで大変でさ。』

嘘は言っていない。マジで大変。

『あ、自分がアイドルなるって言ったら応援してくれる？』

とりあえずネタで言ってみよう。

『理由あってアイドル的な？』

『315プロからスカウトですか!？』

『応援くださいっ!!』

『→応援するよっ!!』

おい、望月杏奈ちゃんの真似した奴。怒らないから出てこいよ。
キャラクターネーム、ビビッド・ラビットとリリース・ナイト! 杏奈
ちゃん可愛いんだからな!

百合子と組んでるの好きだよ。

成長c h u ↓ L O V E R!!めっちゃ好きよ。

もつともーつとラブしたい!だよ。

『ていうか、315プロって男性のアイドル事務所でしょうが。』
思った事をチャットで言ってみる。

『え、ひきにやんって女性:~?』

『ごご最近で一番衝撃をうけたぜ。』

『ひつきにやーん、とりあえず結婚してくれ。』

『お、ひきにやんさんちーっす。』

お、おう…。

男性だと思われてたらしい。

え:マジかよ。

まあ、ガチプの人で女性って少ないしなあ。

うっわあ:少しびっくり。

性別、別に言っていないけどさー。けどさー。

とりあえず討伐いこ。

誰誘おうかなあ…。

ビビッド・ラビットさんから個人メッセージが届く。

『アイドル、もしもなるんだったら頑張つて! (*・▽・*)
ビビッド・ラビットさん:(キュン

こういう子もロリだったらいいなあ。シヨタでもおっけー。受け
入れるよ。

さつきは勝手に心の中で怒つてごめんね。

はあ…。

とりあえず346プロのオーディション受けてみるか。

主人公補正で合格だったらなにこのクソゲーだよ。うん。

書類審査があるんだ。ふーん。

締切は来週まで…。うつわ。急がないと。

写真とプロフィール。未成年は保護者の承諾…。

お母さんが帰ってくるまで待とう。うん。

それまでゲームゲーム♪

『ひぎにゃんさん…?』

なぜかぼろぼろの私のキャラクターがいた。

うん、調子のりすぎたわ。

一人でレイピアぶんぶん振り回して切りつけてたらそりや敵にタゲられるわ。

『ごめん、やらかした。なんか楽しすぎて。

疲れてるっばいからも落ちるわ。』

そう打ち込んだらログアウトする。

うつわー。なんか調子が狂う。

目線も違うし、画質とかパソコンのスペックが低いからかなあ。荒いし。

うう…。

設備整えたい…。

「ただいまー。うさぎ、まだ起きてるの?」

「おかえりー!うん、起きてた!」

お母さんの帰りです。

アイドルのオーディション受けたと言ったらどうなるかなあ。

(多分、とてもびっくりするわね。うん。

「ねえ、お母さん。お願いがあるんだ…。

私、アイドルになりたいっ。」

お母さんは頭をぽふぽふ撫でながら言う。

「きつとなれるわよ。さあ、寝ましようね。」

ちーがーうー！これ絶対冗談、もしくは子供の憧れだと思ってるパターンじゃない！

「じゃあオーディションの募集要項みて、サインして？」

「え？」

ほら。真面目に受け止めてなかったですよ？私、わかるよ。

ほらほらちゃんと見てね。

「うさぎ…。アイドルになりたいって気持ちはよくわかるんだけど…ね。さすがに難しいわ。

お母さんお仕事で忙しいから送迎だって出来ないし、ライブだって見に行けないの。」

むう…来ると思ってたよ。

「ありすちゃんだって親が忙しいから送迎はプロデューサーさんにしてもらってるんだよ。

ライブに来てもらえなくても、それでも私頑張るからっ。」

他にも色々と問題はある、はず。

とりあえずオーディションが受けたっていう動機もダメだし。

ありすちゃんが知ったら血相変えて怒りそうだなあ。

でもさ、やつぱりありすちゃんと近い場所にいるためには、多分アイドルしかないと思うんだよね。

目指せ、神アイドルっ！

違う、これ違う奴だ。

あ、今の年齢だったらプリパラしても怪訝そうな目で見られないな。だって幼女先輩だもん。うん。

(どうしよう。今すぐここいつ殴りたい。

めっちゃお母さん考えてるじゃん。

ようやくお母さんの口が開く。

「ねえ、うさぎ」。

お母さんはうさぎがしたい事はなんでもさせてあげたいの。
アイドルの件も…。

うさぎがちゃんとアイドルになる為に自分でどうすればいいか、調べたのよね。

いいわ。承諾しましょう。

ただし約束。

受からなくても、夢は諦めちゃダメよ。最初から上手くいく事なんてないんだから。」

ヤバイ。お母さんかつこいい。

承諾げつとだよ。

151匹の間を探しにいかなきゃ！

って違う。しかも今、ポケモンって151匹どころじゃないし。

まあいい。

募集要項書いて、締切までに郵便局行かないと。

「さ、うさぎはもう寝ましょ。」

明日も頑張らましょうね。」

「はーい。」

おやすみなさくい。」

部屋の明かりが消えて、真っ暗だ。

徐々に瞼が閉じていく。

おやすみなさい。

(はい、おやすみ。

○**○**○**○**○**○

驚いた。

いきなり娘がアイドルになりたいだなんて言うんだもの。

346プロの募集要項まで調べて持ってきて…。

私の旦那は346プロの武内プロデューサーと仲がよかった。

そして、私は昔アイドルをしていた。

しかし…私はアイドルを辞めた。

滅茶苦茶な理由で、だ。

周りの人からはプロデューサーとの喧嘩とか、軋轢が生じた結果とか言われてるけど…100%彼は悪くない。

私の身勝手。

武内プロデューサーはショックを受け、アイドルプロデューズが出来なくなっていた。

最近、シンデレラプロジェクトなるものを立ち上げて、有名にはなってきたているが。

これは何かの縁なんだろうか。

娘はすやすやと寝息をたてて寝ている。

そんな娘を撫でる。

「私と同じ結末はダメよ…うさぎ。」

5話

「さてさて、新しい朝だ！心地の良い朝だ！…んなワケないだろ。…はあ。」

夢じゃないんだ…。」

朝起きて手を見たら見慣れない小さい手で少し悲鳴あげたよ。うん…。」

私、弥生うさぎは昨日転生してまいりました。

転生先は10歳のロリ娘です。

(朝からうるさい。

この人は弥生うさぎを10歳まで育てた…うーん、もう1人の弥生うさぎといえいいのかな。

「うさぎ…？遅刻するわよ…？」

「はあ…い！」

私を呼んでるのはお母さん。

あ、名前はまだ知らないんだよね。

(弥生…美月だよ。お母さんの名前。

へえ、普通にいい名前じゃないか。

まあ、美月お母さんはとても美人で優しいです。1日しかまだ過ごしてないけど。

朝ごはんはトーストの上に目玉焼きをのつけたやつとサラダです。

朝ごはんはしつかり食べなきゃね。

「ごちそうさまっ。行ってきますっ。」

玄関の外は晴れていて、朝から眩しいなあ…なんて思った。引きこもりに太陽なんて…溶けちゃうじゃないか。

バターみたいにとろとろだぜ。

学校までの道のりは少し遠い。自転車登校を要求したい！

自転車乗って、ヒメヒメ歌いたい。

「あれ？うさちゃん、今日はなんか違う…？」

何か違う…？

え…どこか違ったかなあ。中身が別人だからさ…わかんねえだべさ…。

(あ、あんた髪結んでないし…。

あ、ツインテするの忘れてた…。

だって、腰まで髪あるんだもん。綺麗にするので精一杯ですよ。

ツインテロリって素晴らしいんだけど、こんなに大変だとは思わなかったぜ。

よし、ツインテロリ保護の為に団体作ろう。

毎朝ロリを可愛くツインテにしてくれる団体。

(んな団体作らないでよ。バカじゃないの?)

もう1人のうさぎが歩きながらツインテを作ってくれる。

ツインテロリがツインデレだと萌えだよね。

つと、誰かが私の方をつつく。

「弥生さん。おはようございます。」

「ありすちゃんっ!」

「橘です。一応年上ですよ?」

どうしよう。朝から幸せだ…。

「あ、あり…橘さん。今日も会えて嬉しいですっ。」

「今日、会うのは今だけでしようけどね。」

今日は午後からレッスンなんですよ。」

いやいや。今の時間だけでもう幸せで死ぬる…。

なにこの天使。

橘ですって言うところまで可愛い…。

「プロデューサーさんからだ。」

はい。橘です。」

電話がかかってきたみたいで、話し始める。

「え?…はい。…大丈夫です。私、子供じゃありませんから。」

プロデューサーさんこそ、体調崩さないように気をつけてくださいね。」

電話が終了したらしい。

ありすちゃんは、寂しそうな顔でこう言った。

「今日のレッスン、プロデューサーさん来れないみたいです。まあ…毎日忙しいんですから仕方ないですね。」

「それでは、レッスン頑張りますね。」

「う、うん。頑張ってるね。」

「ばいばいと手を振ってくれるありすちゃんを、私は見送る事しか出来なかった。」

「なんて無力なんだろう…。」

―――夜

『ひきにゃんさん、なんかあつた？』

「見つけた敵を片っ端から倒していく。」

『なんでもない。』

「このゲームで私達チャット仲間が仲良くするために決められている事がある。」

「それは「リアル」に介入しない事。」

「夢を語るのはいいけど、今の年齢も性別も住んでる場所も秘密。」

「まあ、それって基本的な事だけだね。」

「オフ会なんてもつてのほか。」

「そんな交流なんていらないんだ。」

『さて、プレイヤーバトルでも参加してみよっか。』

「とりあえずむしゃくしゃする気持ちをぶつきたいから、プレイヤーバトル会場に移動する。」

『いやいやひきにゃんさん、俺低レベルなんですけど』

『いい。私にバフだけお願い。筋力アップと重量アップね。あと、魔法無効果もよろしく。』

「私は強い。強い。」

「ありすちゃんを守るのは私じゃなきゃ。」

「私ならあんな寂しそうな顔をさせないから。」

「絶対に、ありすちゃんを笑顔にしなきゃ。」

相手は開始すぐ、こっちに斬りかかる。

そんなのは予測出来る。

だから私は避ける。

後ろのバフ係の子に近寄れないように目の前でしびれ攻撃。

後ろに投げて、まとめて爆弾でもくらっちゃえ…。

『マジで勝ちやがった…。』

『バフさんきゅ。』

あー！むしゃくしやするううううううっ！

なあにが大人じゃあ、プロデューサーじゃあ！

ありすちゃんを笑顔に出来ないくせに…。

コーラもつともつとじゃー！

「ただいま、うさぎ。」

「おかえりなさいっ。」

お母さんが帰ってくる。

はあ、ログアウトしとこ。

『おちま。』

『おっー』

『まったねー』

lineを見てみると、ありすちゃんからメッセージが届いていました。

【橘ありす：今、お話できますか？】

【橘ありす：やっぱりなんでもありません。】

いやいや、なんでもなくないよね!?

【うさぎ：どうしたんですか？】

とりあえず、送ってみる。

しばらく待ってみただけだけど、その日ありすちゃんからの返事がくる事はなかった。

「うう…眠い…。」

「ばしやばしや顔を洗う。」

「水冷たい…。」

「髪もちゃんと結んだし、学校に行かないとな。」

「お母さん、行ってきます！」

「いつてらっしやい！」

朝、lineを見たら、「橘ありすすみません。寝ていました。」と。寝てたのなら仕方ない！

「ありすちゃん可愛い。」

「今日は仕事があるから学校には来ないらしい。」

「少し残念だ…。」

学校近くの家からテレビの音が聞こえる。ボリュームあげすぎじゃない？

「島村卯月っ！頑張りますっ。」

「しまむーの声が聞こえる。」

「憧れてた場所を♪ただ遠くから見ていた♪」

「S(mile)ING!だ。」

「しまむーが歌う歌で一番好き。」

「愛を込めてずっと歌うよーっ！」

「そこまで聞いてから学校へ歩き出す。」

この曲を歌う前、島村卯月はアイドルを辞めようと思っていたらしい。

「それを聞いた時はびっくりしたなあ。」

「鬱状態だったらしいし、彼女が心配だよ。」

「ニュージエネの3人がバラバラになった時はどうしようって思ったけどね。」

「ちゃんみおは舞台。しぶりんはトラプリ。しまむーがこっぴーとのユニット。」

本当にあの時はニュージエネ解散かと思った…。

あの時のありすちゃんは、文香さんとユニット組んでたよね。

ありすちゃんと文香さんはいいユニットです。

「おはよーっ。」

お、教室にいつの間にか着いてた。

考え事してるとあつという間だねえ。

この日も何事もなく1日を過ごす私。

まさか、ライブ当日に事件が起きるなんて全然思ってた。

6話

「え……？機材を載せた車が渋滞でまだ来てない!? どうするんだよ。」

「儲け重視で安いところで頼むからっすよ……。」

きゅつきゅつとレツスンシューズが音を鳴らす。

ライブ…頑張らなきゃ……。

プロデューサーの期待に応えなきゃ……。

「ありすちゃん。少し…休憩を入れた方が……。」

「大丈夫です。まだやれます。」

大好きなプロデューサーの為に……。

名前を読んでもらう為に頑張らなきゃ……。

「あ、ありすちゃんっ!」

不意に身体が重くなる。

ダメ、こんな時に……。

まだ私は出来る…出来る……。

弥生さんも来てくれるんだから……。

「んーっ。雨降りだなあ……。」

傘を差して、私はライブ会場まで移動する。

ライブ会場までの電車賃はお母さんが出してくれました。帰りは迎えに来るとのこと。

私はとりあえず、女性専用の車両に乗る。

「お姉ちゃん、まだ着かないの？やっぱりPさんに頼んだ方がよかつたんじゃない?」

「ううん、ありすちゃんのライブ見る為なら頑張れるんだ★」

あ、あれ?なんか聞き覚えがする声だ。

「や、ヤバくない?結構こっち見られてるよ?」

「大丈夫大丈夫ってばー!」

電車の中で大騒ぎはよくないので、後で握手とサインお願いしよう。うん。

ただしかし、アイドルと一緒にの電車とか最高すぎですな。

えとえと前からずっと♪それからそれから……♪

「ファンですー!」?キヤー!／

ね、お願い♪最後はさ、さ、サインください♪

って言ったら怒られそう。城ヶ崎姉妹ファンに殺されそう。

ちなみにスパラブ大好きだよ。世界中にスパラブ!

電車がライブ会場最寄り駅に停車し、私は降りる。

サイン貰おうと思ったらそそくさと消えていった…。

まあ、そうよね。

人生は甘くないものです。

何かにとんつとぶつかる。

ポカリとか風邪薬を沢山抱えた男性だ。

「あ、ごめんなさいっ。」

「す、すみませんっ。」

散らばってしまった蓋が星型の栄養ドリンクやポカリや風邪薬、冷えびた等々を拾う。

いや、持ちすぎだろう。

「すみません、慌てすぎてしまったために…袋に入れる事すら忘れて…。」

「え…バカなんですか?」

どんなに慌てても、こんな事になったら目も当てられないじゃないですか。」

半分抱えて男性に申し出る。

「ごこの近くまでなら運んであげます。」

「いいんですか!?!」

ありすちゃんのリブまで時間はまだある。

ありすちゃんならここは放っておかないで手伝うだろう。

(案外優しいんだ。男性に惚れた?)

ちがわいっ!

ありすちゃん一筋なの!

ライブ会場の前まで歩く。

あー、通りすぎちやうんだらうなあ。

「目的地はここです。」

「え…?」

ライブ会場が目的地だったらしい。

「まさか…アイドル…?」

「いえ、自分はプロデューサーです。」

びっくりだよ。

今日ライブするのってありすちゃん以外にもいるんだよね。

何のプロデューサーなんだろう。

音楽?映像?

「私も目的地ここだったんでちやうどよかったです。」

アイドルの控え室は一般公開NGという事で入り口付近でお別れだ。

「弥生さん。ありがとうございます。」

「はいはい、お兄さんも頑張ってたね。」

そういや…風邪薬は誰のだったのかな。

誰か風邪引いたのか?

熱い…熱いです…

文香さんが心配そうにこちらを見えています。

「ありすちゃん、そろそろプロデューサーが来ますから。」

返事すら出来ずに私はうなずく。

廊下の方から話し声が聞こえる。

「それでは、ここから先が一般公開NGなんで。」

「まあ、そうよね。」

「弥生さん、ありがとうございます。」

「はいはい、お兄さんも頑張ってたね。」

や、弥生さん…？

ふらつく身体を無理矢理動かします。

プロデューサーが色々抱えて部屋に入ります。

「あ、ありす！動いちゃダメじゃないか！」

「……よいさん……や、よいさんがいるんでしょう……？」

弥生さんが来てくれたんです。

本番前に会えたらきつと頑張れるから……。

プロデューサーが部屋から出て叫びます。

「弥生さんっ、ま、待って……！」

会いたがってる人がいるんですっ。」

「お兄さん、人使い荒すぎ。」

あ、でも、会いたがってる人がいるんですか！

アイドルですか？私、アイドル大好きなんですよ〜！」

……弥生さんの声が近づきます。

「弥生さ…ん。」

「弥生さ…ん。」

呼び止められて戻ったら、驚いた。

「あ、ありすちゃん……!!？」

ありすちゃんがふらふらしながらこつちに来る。

「ありすじゃないれす……橘れしゅ……。」

呂律が回ってない。

おでこを触ってみるととても熱い。

「え……っ？」

文香さん…え？生文香さんがお兄さんに状況説明をしている。

「きてくれて…：…ありがとうございます。」

いやいや、ありすちゃん寝て！

立ってちゃダメだよ。

「機材も来ない、ライブするアイドルは高熱。

ライブは中止がいいんじゃないか？」

7話

ありすちゃん、ふらふらしながら私の元へ来る。

「弥生ちゃん……。」

ありすちゃん可愛いトウंक……じゃなくてっ。

落ち着いて。落ち着け。

私はありすちゃん一筋。幸せすぎる。はあはあ……。

今すぐに抱き締めてしまいたい……っ。

「ありすちゃん、動いたらダメ……です。」

文香さんがやんわり止める。

文香さんっていい香りがすりゅ……フローラル系といつかなんといつか……。

あと、かなりの巨乳。顔うずめてみたい！

おっと、鼻血が出そう。いとやばし。

「……弥生さん、顔真っ赤ですけど大丈夫ですか？」

あ、大丈夫だよありすちゃん。これは興奮しすぎだから。ふごふご。

「あの……弥生さんは……ありすちゃんとうとういった関係で……？」

文香さんから話掛けられただど!?もう私は幸せだ。

ありすちゃんとは学校が一緒の友達です。

「ありすちゃんとは結婚を前提とした「弥生さん!」……すみません、冗談です。普通に学校が一緒の友達……です。」

ありすちゃんが物凄くこちらを見てます。妄想を口にしてしまったのが敗因ですね。わかるわ。

「と、友達……。」

ありすちゃんが何やら嬉しそうです。え、結婚前提って言われたの嬉しかったの!?

「ありすちゃん、寝てなさい。」

「は、はい。」

文香さんがやんわりと、でも少し強めにありすちゃんを寝かせます。

やったねうさちゃん。寝顔が見れるよ！

「……文香さん。ステージには立ちたいです。」

風邪なんかでライブ中止なんて絶対させませんから。」

……そんなのプロ失格です。という呟きまで聞こえた。

そんなありすちゃんの頭を撫でながら文香さんが言う。

「大丈夫です。……私がいいますから。」

なにこのキマシタワー展開。

薄い本ばりばり書けちゃうううううううつ。しゅごい。創作意欲

ががんばだよおおおおおつ。

(うぎっ、おまけにキモっ。変態。ちよ、橘さんにそういうの言ったら

一発で嫌われるから。

あ、マジっすか。気をつけますよ。」

声が心底呆れているのだけは伝わったかな。

(ていうかガチで引く。

引かないでー。」

「弥生……えつと……。」

「うさぎですよ。」

文香さんが目を見開く。

「そう……なんですか。」

不思議の国のアリスって知っていますか？」

確か作者が家庭教師先の女の子に贈った物語だっけ。

ちゃんとは読んでないけど。

あれだよ。ちっちゃい頃にデ○○○版の映画を見た程度。内容

忘れた。

「そのお話に……おかしな帽子屋さんとおかしなパーティを開く3月ウ

サギっていうキャラクターがいるんです。」

「おかしな……？」

咄嗟に思い浮かんだのが、甘いキスなんて私出来ない♪でした。詳

しくは三村かな子ちゃんの「おかしな国のおかし屋さん」でね。

「本当は別な表現なんですけど、うさぎさんはまだ小学生ですから。」

「おー。気を遣わなくていいのに……。」

見た目は子供、頭脳は女子高生。

その名は元ヒキニート 弥生うさぎ！

(おいふざけんな)

声に真面目に怒られました。

「ふふ。ありすちゃんとうさぎさん……なんだか運命を感じますね。素敵です……。」

「文香さんって、む……。」

(おい自重しろ。)

文香さんの胸のサイズ聞こうとしたら声が出せなくなっただけ。酷い。ちっちゃいからこそ出来るセクハラでしょーが。

スカートめくりだって今なら合法！

(死ね変態。気持ち悪いから。)

「む……？」

「むにむにしたもの好きですか!?!」

「むにむに……？」

文香さんが混乱している。

「本以外……あまり興味がないので……。」

「最近専ら電子書籍ですか!?!」

「いえ……紙の温かみが好きですから……。」

私、なにやってるんだろう。

しかし、文香さんはなんだか嬉しそうだ。

「本の話なら……ずっと語ってほしいですから……。」

あー、マジ文香さん可愛い。

「最近のおすすめの本は何ですか!?!」

「えーと……星の王子様でしょうか。」

サンテグジュペリの書いた物語なのですが、砂糖菓子のような繊細さがあつて……私はとても大好きです。」

大好きです、いただきましたーっ。

星の王子様か……一瞬、カレーの王子様とテニスの王子様が出てきたよ。

「サンテグジュペリは戦闘機のパイロットとして空へと飛び立ってか

ら行方不明のままですが……私はきつと、王子様のそばに居るんじゃないかなって思うんです。」

「王子様のそばに……？」

私がそう聞くと、文香さんはふわりと笑って、「この続きは読んでみてから、にしましようね。」と言った。

とりあえず図書館で星の王子様借りよう。そうしよう。

あ、お兄さんが寝てる。

なんかお疲れ気味ですのう。

よし。いたずらしてみるか。(ニヤツ)

「おにいちゃん…、またこんなところで寝ちやって……。風邪引いちやうよ?」

反応無しっていうか、文香さんがなぜか顔真っ赤にしてる。

「お、お、お、お兄さんだったんですか!?!」

「違いますよ?本日初対面の方です。」

あ、おにいちゃんとか言ったからだ。

ごみいちゃんとか言わなくてよかったー。

おにいちゃんもとい、お兄さんが起きる。

「あ、あぁっ。すみませんすみませんっ。寝ちやってました……。」「

「あ、お兄さん起きた。」

お兄さんが私を見て、少し首をかしげる。

そして、あ、と言って手を打つ。

「弥生さん。橘さんとお話出来ましたか?」

「おうよ。ありすちやんと話せたけどさ。」

ありすちやん、熱あるのに大丈夫なの?」

純粹な疑問。

「私は……プロですから。」

その問いに、ありすちやん本人が答える。

「沢山のファンの皆さんが待っているんです。」

こんな熱くらいで休んでいられません。
少し休んだら元気も出てきましたし。

文香さん、リハーサルに行きますよ。」

ありすちゃんの足取りはもうふらついてなんかない、しっかりした
もので。

すたすたと歩いて行かれて……え、私の存在忘れてる!?
と思っただら戻ってきた。

「弥生さん。友達って言うてくれて……嬉しかったです。

そ、それでは。また後で。」

いいか。私の後に付いてきな。

叫ぶ準備は出来てるね。ア—イ?

橘ありすは!最高だ!

橘ありすは!可愛いぜ!

橘ありすは!俺の嫁!

一人でコール&レスポンスってちよつと寂しいな。誰か手伝って
欲しいなあ(チラツ

(絶っ対に嫌よ。ばっかじゃないの?)

あ、はい。

お兄さん辺りに協力を仰ごう。

「あ、弥生さん。よかったら僕の名刺……貰ってくれないかな。」

お兄さんが名刺を差し出してくる。

”346プロダクション 芸能科

周防桜”

「桜さんって言うんだ?」

「女性っぽい名前ですよ。妹は桃子って言うんですよ。なのに長男
の僕は……あはは。」

ちよい待て。

今重要な言葉が聞こえた。

「も、桃子って……。」

「あ……はい。そうですよ。彼女は僕の妹です。」

周防桃子……………桃子ちゃんのお兄さんだと!?

つていうかさつきのおにいちちゃんつての桃子ちゃんイメージして
たんですけど!?

ま、マジかよ。おっふ…。

斉木くんもきつとおっふしちやうよ。

そんな中、文香さんが走って楽屋まで戻ってくる。

え、ありすちゃんに何かあったの!?

「ぶ、プロデューサー…：たっ大変です。

機材が全く届いていなくて、会場の設備が整っていない状況なんで
すっ。」

え……?

8話

「今日のライブは中止にするしかない。」

ライブの為の設営も何もかもされていけない、そんなステージの上で立ち尽くし、呆然とスタッフを見つめるありすちゃん。

こんな時になんでお兄さんはいないのかなあ!?

あー!もう!イライラする!!!

「今からでも…設営すれば間に合います!」

「機材もないのにどうやってかい?」

「それにスタッフも足りないよね。見てわかんないの?」

「やっぱり小学生だからそんな単純な事すらわからないのかしら。」

ありすちゃんは一生懸命なのに、そうやって嘲笑った奴が許せなかった。

「機材があればいいんだよね?」

私は堂々と、うわっ…目線怖っ!

まあ、とにかく堂々とするのみ。

「ねえ、今日のこの会場のスケジュールって覚えてるかな?」

確か〜他にもライブがあったよね。

そして、1組目のライブがそろそろ終了間際。

撤収スタッフさんに事情説明とか交渉とかその他諸々を大人の皆さんがしたら機材を確保する事は出来るんじゃないかな?」

ただ、そんなにうまくいくなんて当然思ってたんじゃない。

でもこれが今の私が考えつく最善手なわけなのだよ。

そしたら、お兄さんが走ってここまで来た。

「機材確保できました!これで設営出来ますよね!」

え、もしかしていなかったのって機材確保の為…。

すごい!有能なプロデューサーじゃん!さっきはごめん!イライラしちゃいけなかったよ…。

「ちようど今撤収をしているスタッフさんがいらっしやいましたので、なんとか交渉してきました。」

すみません、今からでも設営は可能でしょうか。」

しかも私が思いついたのと同じ！素晴らしい！
いや、普通に考えつくよねえ…

なんとかライブギリギリだけど設営も終わって、リハーサルの為に私はお兄さんに会場の外に連れ出される。

「ここからは彼女のステージまでのお楽しみにしておいてくださいね。ここまで本当にありがとうございます。」

橘さんも嬉しそうでした…。」

「いやあ、本当ありすちゃん可愛い…。」

お兄さんがぐすつと笑ってさつきくれた名刺と似たような大きさのカードをくれる。

へ、あ?!ふええ!?

も、桃子パイセンのサイン!!!!

「実は前にサインの練習台として渡されたものです。今回のお礼…こんなでもよろしいでしょうか?」

「ありがとうございますいまひゅ!!」

うわあわああお…声にならないし舌嚙んだし…。

「お兄さん、私、アイドルになれたらお兄さんにプロデューサーしてもらいたい!」

そしたらありすちゃんとユニット組ませてね!」

「プロデューサーしてもらいたいなんて、プロデューサー冥利に尽きるお褒めのお言葉ありがとうございます。」

お兄さんとはここで別れた。

お兄さん神かよ。いや、神だな。

け、決してモノに釣られてしまったわけじゃないけどあのお兄さん好き!

…いやいや待て待て。

ありすちゃんのプロデューサーなんだよ?

ありすちゃんがいつだって会いたがってる…。

よし、切り替え切り替え。

また、どこかで会えるといいな的なやつだよ！うん！

「つて、ライブ始まっちゃう!!!」

ライブはすっごい最高だった！

途中ゲストで城ヶ崎姉妹が出た時には思わず悲鳴が出ちゃったよ

!!!!

でも、ありすちゃん…大丈夫かな。

ライブ終わったら、ありすちゃんのところへ行こうと思ったけれど
：関係者でもなんでもない私はありすちゃんのところにとどり着け
ず、普通に帰宅するしかなかった。